

東京都市大が理工系女性卒業生調査

東京都市大学女性研究者支援室は、理工系女性卒業生2,253人を対象にした実態調査の結果を公表。比較的回収率が高く、5.25通の返信があった。女性の仕事と育児などの両立に、半数程度が「夫の協力が」と回答している。今回の調査では、住所が判明している1960年度から2009年度までの卒業生に、卒業後の進路等についてアンケートを行った。回答者は、20代から40代が90%以上を占めた。同支援室の小川順子室長は「宇宙飛行士などスーパーロールモデルは良く見えているが、普通の高校生が真似できるような身近なロールモデル像をアンケートから探していきたい」としている。

理数が好きで選んだ道

望むのは職場での昇進

社会では男女差を意識

調査結果では、就業関係 配偶者の有無は半々で、約の質問で「今やりたいこと」6割には子どもがいない。は、現在の職場での昇格が 女性の仕事・家事・育児・1位(110人)だった。介護と自分のための時間のキャリアを積みながら社内 両立に必要なことに、約半での活躍を望んでいる姿が 数が「夫の協力」を一番にうかがえる。また、なぜ理工系を選択したかについて は、約半数が「理科や数学の分野が好きだった」からと答えている。理工系分野は、卒業生同士のコミュニティに女性が少ない理由は「女性が必要かどうかは、半性の意識」が半数弱を占め 数以上が必要とし、4割弱ており、教育環境や家庭環境がどちらとも言えないと回答にはあまり着目していない。また、大学にようだ。

ジェンダーについては、学生時代に男性の多い環境で困ったことは約7割がなかったとしていたが、職場での男女差は6割が感じるとしており、学校と社会と違いが見られる。回答者の

仕事・育児「夫の協力 必要です」

ている人も多かった。

同大学では、年々女性卒業生は増えているが、全体に占める割合は5・78%(昨年度とまたまた低い。指導教官も工学系では女性は数えるほどだ。支援プロジェクトの担当責任者である岡田住子・工学部原子力研究所准教授は「理工系を志望する女子はかなり早くから自分のロードマップができていた。私たちはここをバックアップしたい。夫の協力や多様な働き方ができるように学内や社会全体の改革を進め、職場での昇格や昇進を性差で決めず、資格取得がうまくいくように学協会から支援をすべき。アンケート回収率の高さは、母校への愛着心が感じられる。本学のような理工系大学では、母校が核になるネットワークを構築して、ロールモデルの見える化、女性研究者や技術者の活躍・増加を推し進めていきたい。社会・学協会・他大学との連携が鍵になる」と話す。